(レコンキスタ・RECONQUISTA・令和５年(2023)8月1日掲載*)

和をもって貴しとなす

― 米中露三大軍事大国に囲まれた和国・日本の世界史的意義 ―

村野謙吉

私の歴史観 ― 仏教・岡倉天心・ジョージ・オーウェル

私は専門が仏教学なので、私の歴史の見方は仏教の縁起論の立場が基本です。

縁起論とは、すべての物事には因果関係がありダイナミックに連動し ているということを基本として、いろいろな見方を教えています。
　例えば一水四見といいます。人間が水と見るものを天人は瑠璃でできた大地、地獄の住人は膿みで充満した河、魚は住処としてそれぞれ見る。つまり同一の客観的対象が、主観の認識能力や利害関係などによって様々に認識されうることです。

四十年ほど前にイギリスに一年くらいいたことがありました。その時に知人からもらったジョージ・オーウェル の『ビルマの日々』を読んだのがきっかけで、仏教学の研究のかたわらオーウェルを研究するに至りました。そこで英文学は専門ではありませんが、オーウェルの作品は英文ですべて読み、さらに彼が読んだとされる重要文献にもすべて目を通しております。

（2023年7月10日）

そういうわけで、 オーウェルを通してイギリス人を見る、イギリス人を通してヨーロッパ人を見る、ヨーロッ パ人を通して世界政治を見る、といった姿勢がいつの間にか身についてしまっています。

十数年前に大病をしました。三ヶ月間完全点滴の入院生活をしましたが、病床で岡倉天心の『The Ideals of the East（東洋の理想; 1903)』を読んでアジアに目覚めました。同時に日本に目覚めたといってよいかもしれません。

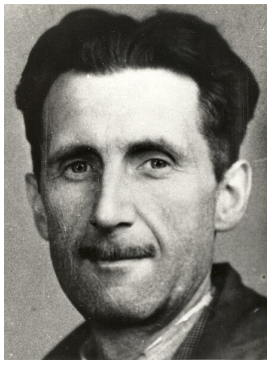
岡倉天心（1862-1913)

この本は「Asia is one (アジアは一つ)」という有名な言葉で始まります。天心は東京美術学校の設立に関わり、日本美術院を創設したことなどでよく知られてい る人物です。

彼は1901年（明治34） から1902年にインドに滞在し、タゴールやヴィヴェーカーナンダらと交流しています。そこで彼はインドの精神文明についての深い理解があり、さらに中国の文明の本質をも深く洞察し、英語も堪能でしたので米国人の思考方法などにも精通し、日本文化の価値を英文で海外に紹介しました。

そこで、私の歴史的ものの見方は、縁起論にもとづいてオーウェルの西欧政治の見方が適用されており、先に述べたように、アジアに目覚め、日本の歴史的存在意義に関心を持ったので、ここ十数年アジアの中の日本の立場が私の関心の中心になっています。

オーウェルの生き様



(1903-1950)

オーウェルですが、彼は、ある意味でヨーロッパ人、限定すればアングロサクソン特有の政治的情念の本質についての最も鋭い洞察者です。彼の洞察の対象は、ソ連の共産主義やナチスのファシズムの深層に流れる全体主義の情念で、それを解剖したのが 『1984年』という小説です。

『1984年』という作品は読めば読むほど意味深で、地球的規模で世界を支配しようとする人々の思考回路を暗示していると思います。オーウェルの父親は英領インド帝国の阿片局の役人で、当時のイギリスはインドにおいてアヘンの製造を国家事業としてやっていました。

しかしオーウェルは、イギリス人自身を偽善的だと辛辣に批判をするような人ですが、阿片の ことについては一言も語っていません。自分の父親が阿片に関わる仕事をしていたということを恥 じていたのでしょう。そしてヨーロッパ人の生活が豊かに保たれているのは植民地からの収奪のお陰だということも的確に指摘しています。

オーウェルは奨学金をもらってエリートのイートン校を卒業しますが、大学へ は進まずに十九歳で英領インド帝国のビルマ（現在のミャンマー）の警察官になります。親子二代にわたってイギリスの植民地政策の現場に関わっていますが、オーウェルはやがてイギリスの植民地政策の徹底した批判者となります。
　ビ ルマの警察を辞めて帰国しますが、一九三六年、三十三歳の時にスペイン内戦が起こります。これは第二次世界大戦の前哨戦です。彼はスペイン内戦にジャーナリストとして参加します。 ここで オーウェルが目の当たりにしたのが、ファシズムとソ連共産主義の双方の実態の虚偽性でした。 そしてファシスト兵の狙撃によって頸部に貫通銃創を受け、スペインを脱出しイギリスに帰国。三十五歳で片肺に結核が発病、そして第二次世界大戦を経験します。

オーウェルはイギリスの植民地政策の実態とスペイン内戦と第二次世界大戦を体験し、それが『1984年』という作品に結実するわけです。一九五〇年一月、入院中の病院で大量に喀血、享年四十六歳の生涯でした。

『1984年』の世界

オーウェルの『1984年』の世界は、世界を支配するビッグブラザーに象徴される徹底した管理社会であり、歴史が改ざんされ、自由と平等などの重要な理念 が二重の意味を持ち支配者の意図が絶対に知られないようになっています。
　社会は上層、中層、下層の三 階層に再編され、世界はオセアニア、ユーラシア、イースタシアという三つの大きな覇権勢力に分断統治さ れています。 この三つの勢力の中で常に二国が戦わされています。

この『1984年』の視点は、今日のウクライナとロシアの戦争の見方にも関わってくるでしょう。ゼレンスキーとプーチン、どちらが良くて悪いのか、彼ら二人は戦わされているのではないか。『1984年』の世界では戦争の目的は戦争自身であるという以上に言うことが できません。

常時、各国が分断統治され戦わされているわけです。戦わされている方は被害者だけれども、それについて何も責任も持たずに遠隔的に管理して いる勢力がある。それを最近ではグローバリストの勢力だ、ディープステイト（深層政府）だ、やネオコンだなどと言われているでしょうが、それは陰謀論だとマスコミでは扱われているようです。

いずれにせよ『1984年』はアングロサクソンの支配情念を継承して肥大化した支配情念を持つアングロアメリカンを中心とした西洋の政治情念の世界です。『1984年』 の世界では、すべて戦争は偽計である (the entire war is spurious.)である、とも述べられています。

マスコミの報道で、米中が、米露が対立している、中国が日本を占領しようとしている、というような報道が流され、それについて国際政治学者らの説明に一喜一憂している大衆を尻目に、背後に働いている勢力を我々は忘れがちです。しかし『1984年』 で示唆された世界が現在も展開していると決めつけること自体がまやかしであるかもしれません。

オーウェルを読み、岡倉天心のアジアの中の日本を思いながら、日本の歴史とは何か、世界に誇るべき日本という価値とは何か、そんなことを私は今も考えつづけているわけです。

このような私の問題意識が、天皇（皇室）、憲法、自衛隊、日中関係、日米関係などを考える基準になっています。

戦争体験がない日本国民

歴史は、ある意味戦争史でもありますが、日本の歴史の特徴は日本国民に戦争体験がないということです。　戦争体験とは、たとえば東京に外国の兵隊がやってきて、その外国の敵に対 して日本の兵隊が国民を守るために闘ったという歴史的体験のことです。大日本帝国の兵隊さんは朝鮮半島、中国、南アジアの現地の人々との戦闘体験はあるけれども、日本の本土に来た外国の敵の兵隊と戦ったということはありません。

天下分け目の関ヶ原の戦いは、同じ日本人のサムライ同士のたった1日の戦いです。日本国民を守る戦いではなく、もちろん当時の日本国民に戦争体験はありません。

さらに有史以来、漢族主導の中国とロシアが日本本土において戦争を仕掛けたことはありません。しかし明治維新以来、日本は日清、日露、日中、日米の戦争に関わってきました。日本の兵隊は外国で戦闘を行ったわけですが、当時の敵国はすべて現在の国連常任理事国であり軍事大国です。中国とロシアはかって日本に攻められたという歴史認識と、その後日本に勝ったという歴史意識を忘れていないと思います。

イギリス王室と和国の皇室

以上は単純な歴史的事実ですが、さらに日本独自なことと言えば、皇室があります。

私は伝統尊重派で皇室の伝統を尊重しますが、天皇はピラミッド型の権力構造の頂点に君臨しているのではなく、平面の中心にあって国民に自ずから信頼されているのが伝統的皇室のあり方です。京都御所は至って無防備ですが、歴代の日本の権力者は誰一人として天皇に指一本も触れません。これはイギリス王室とは完全に違いま す。 イギリスはイギリス王室のもとでアフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、北アメリカなどを征服し、植民地政策も奴隷制も阿片貿易も全て行われました。

イギリス王室の姓はウィンザー家ですが、中国の王朝も姓がありますから、ある一族の国家統治がうまくいかなければがその一族を潰して別の姓の一族が国を支配するので、中国は易姓革命の国です。しかし日本の皇室には姓がありません。中国には易姓革命思想と、宦官、女性の纏足、科挙制度などの文化がありましたが、それらをすべて排除しているのが日本の皇室 です。そして皇室は何よりも万葉集の時代から続く和歌、国民の平安を祈る歌の宗家でもあります。

憲法ですが、憲法という言葉は聖徳太子の十七条憲法に由来し、これは法律文ではなく普遍的な人倫の法則ですから、法律文のように変更があってはなりません。明治維新の当時は良かれと思ったのかもしれませんが、大日本帝国憲法は大日本帝国国法とすべきだったのではないでしょうか。

米国と中国とロシアという三大軍事国家に挟まれた日本

世界に誇る日本という価値、命をかけて守るべき価値とは何か。これを確認しないことには、米中露の三大軍事国家に囲まれた日本の基本姿勢が決まりません。自衛隊の世界的意義もありません。

日本は米中露の三角形の軍事勢力に囲まれて、しかも三角形の一辺の米国に圧倒的に軍事的支配を受けています。

米国の元国務長官のヘンリー・キッシンジャーはドイツに生まれ、ナチスによるユダヤ人迫害 を逃れて米国に帰化した人ですが、彼の有名な言葉があって「アメリカの敵になることは危険かもしれな いが、友人になることは致命的である」(1)と語っています。 米国の友好国である日本は、米国から逃れられない、しかも対等ではない友人なのでしょう。キッシンジャーはユダヤ系ドイツ人ですから、彼の上にロスチャイルド家が構えているようです。(2)

（毛沢東とキッシンジャーの 会談、後ろにいるのは周恩来）

去年のニューヨークタイムズ紙で、ロス チャイルドの妻とローマ教皇がしっかりと金融を中心に協力するという趣旨の記事がでていました。詳しくは、ニューヨークタイムズ紙 (3) をご覧ください。

アングロアメリカンの強力な分断統治の民族的政治情念の上にユダヤ・キリスト教の宗教的情念がグローバルに支配しているかのようです。

Lynn Forester de Rothschild
(Kelsey Brunner for The New York Times)

そして彼らの政治のもとでは、数十年以上かけた大規模な計画はこっそりやるのではなくて世界的に公表されます。その計画を実現するのは、親子二代、三代わたる、どこで戦争が起きても困らないエリートの富裕層の存在がなければならな い。

今後もそのような流れが進行していくのだと思います。

覇権の世界にある和国・日本の立場

『1984年』の世界状況の中で、米中露の軍事的三角形に囲まれた日本の行末を考える時、岡倉天心の文明史観から導かれることは、日本の世界に誇る価値観とは「和の世界観」である、というのが私の立場です。

それは聖徳太子の十七条憲法に凝集された「まこと」が前提です。 生身の聖徳太子には欠点もあった。生身の体の天皇が、皇室として世界に冠たる「まことにもとずく和の心の維持装置」を象徴しているのであると、了解しています。

聖徳太子は神々と仏たちの宗教的住み分けと共存を歴史的に体現している理念的な人格であります。明治維新の瑕疵の一つには、神仏分離に基づく廃仏毀釈にもあります。江戸時代にあった9万ヶ寺が廃仏毀釈によって半分の4万5000ヶ寺になったと言われます。

アングロサクソンの分断統治と言いますが、明治維新の神仏分離は、日本人の和の心の分断で、その影響は今日まで続いています。 聖徳太子は、天皇に準ずる人格であると同時に神道家で、しかも仏教者です。そこになんの矛盾もない。これも「和の世界観」です。

仏教と神道 が対立するのは西欧流の分類にもとづく宗教学の誤解です。仏教が導入された時に、物部氏と蘇我氏が対立したと言われますが、すでに物部氏 が神道を誤解していたのかもしれません。仏教はどこに行っても民族信仰を破壊してはいません。

聖徳太子の十七条憲法は、一応は当時の国家公務員が守るべき心得ですから、国会議員はもちろんのこと、国家公務員には是非とも十七条憲法を 読んでもらいたいものです。GHQに洗脳されたかのような戦後の日本の進歩的知識人は聖徳太子を架空の人物にしたがり、国家を論じることを敬遠するようですが、現代の国際状況は極度の価値観の混乱です。

和国日本の指針として普遍性を持った「まこと」の自覚内容が凝縮されているのが十 七条憲法です。

村野謙吉：仏教、日本文化、ジョージ・オーウェル研究家、翻訳家、コラムニスト（Mainichi Daily News [英文毎日] 1978 -1983) 。訳書：ヴィンセント・スティアー著『プリンティングデザイン・アンド・レイアウト欧文書体とレイアウトの常識』（情報・出版研究会）など。

* 一水会フォーラム・第245回「和をもって貴しとなすー 米中露三大軍事大国に囲まれた和国・日本の世界史的意義」（令和5年7月10日）の講演原稿（図版を加えて一部加筆）

(1) “It may be dangerous to be America's enemy, but to be America's friend is fatal.”
(2) ROTHSCHILD FOUNDATION: The Henry Kissinger Lecture; 10 June 2014; The Rothschild Foundation hosted the Henry Kissinger Lecture at the Royal Academy on 19th May to honour the work and lifetime achievements of Dr Henry Kissinger and to mark his 90th birthday.
To reflect Kissinger’s extensive expertise and influence in the Far East and China, Professor Tu Weiming was invited to give the lecture entitled ‘Cultivating a Culture of Peace and Understanding: A Vison for 21st Century China’. Professor Tu is an eminent academic from Beijing University and Senior Fellow of the Asia Centre at Harvard. As an eminent New Confucian he has written extensively on cultural understanding and the value of certain elements of Confucian philosophy being applied in a contemprary context.
It was a historic occasion in which Dr Kissinger spoke movingly about his early experiences in China, a place he has known intimately for decades and whose modern relations with the West he helped shape. An audience of around 200 people were present for the lecture.
(3) The New York Times ; CORNER OFFICE:The Mogul in Search of a Kinder, Gentler Capitalism. Lynn Forester de Rothschild, founder of the Coalition for Inclusive Capitalism, believes change will come when hedge fund billionaires and Pope Francis work together. By David Gelles /May 15, 2021.